

第二章「阿部一族」における衝突した武士像

第一節 はじめに

「阿部一族」は「興津彌五右衛門の遺書」に引き続き、森鷗外の歴史小説の第二作目として、1913年1月に『中央公論』第28年第1号に発表された。その後、補訂が加えられ、同年6月に朧山書店が出版された鷗外の第一歴史小説集『意地』に収録された。「興津彌五右衛門の遺書」と同じく、細川家で起こった家臣の殉死事件を素材にした作品である。本論文のテキストにしたのは、定稿となった『意地』に収録された本文である。『意地』の広告文において、「阿部一族」の梗概を次のように紹介している。

「阿部一族」は細川家の史料に據り、従四位下左衛門少将兼越中守細川忠利の病死に筆を起し、忠利が其の臣寺本八左衛門以下十八人の殉死の願ひを聴許し、獨り阿部彌一右衛門にのみ之を許さざりしより、彌一右衛門世を狭うし、つひに阿部の一族主家の討手を引受け、悉く滅亡に及ぶ物語¹。

このように、「阿部一族」は細川家の史料に依拠して、細川家と阿部家の君臣関係を中心に描かれた歴史物語である。そして、主君としての忠利は臣下の彌一右衛門の殉死許可を与えない故に、彌一右衛門が社会から孤立し、ついに阿部家の遺族に災難を招き滅亡してしまったのである。ところが、阿部家の滅亡した原因は、彌一右衛門が死んでから、阿部家の家督は嫡子権兵衛に移転し、権兵衛は当代の主君細川光尚との間に衝突が起こり、ついに阿部家に遺族の決定により、主家の討手を招き、滅亡されてしまうのである。換言すれば、阿部家の滅亡した原因は、光尚と阿部家の遺族の君臣関係に隠された感情で起こったのである。従って、「阿部一族」の主人公の武士像を究明するならば、忠利と彌一右衛門、及び光尚と権兵衛及び阿部家の遺族という二組の君臣関係を考察することが必要である。

そこで、本章は、忠利と彌一右衛門、及び光尚と権兵衛及び阿部家の遺族という二組の武士像を取り上げ、君臣関係における支配関係を中心

¹ 森林太郎 (1975) 『鷗外全集』第 38 卷 岩波書店 P.268

に考察する。この考察した結果を通して、忠利が彌一右衛門に殉死の許可を与えない理由を究明し、彌一右衛門が追腹する理由も明らかにする。そして、忠利と彌一右衛門及び光尚と権兵衛及び阿部家の遺族の君臣関係に隠された武士の感情を究明する一方、忠利と彌一右衛門、及び光尚と権兵衛阿部家の遺族の武士像も明らかにする。



第二節 公私混同しない細川忠利

2.1 細川忠利の性格

忠利は細川藩の藩主である。そして、「阿部一族」の冒頭文に、忠利と徳川将軍の君臣関係が書いている。徳川将軍にとって、忠利はどのような藩主であるのか、次の例文を見てみる。

從四位下左近衛少將兼越中守細川忠利は、寛永十八年辛巳の春、餘所よりは早く咲く領地肥後國の花を見棄てて、五十四萬石の大名の晴々しい行列に前後を圍ませ、（中略）徳川将軍は名君の譽の高い三代目の家光で、島原一揆の時賊將天草四郎時貞を討ち取つて大功を立てた忠利の身の上を氣遣ひ、三月二十日には松平伊豆守、阿部豊後守、阿部對馬守の連盟の沙汰書を作らせ、針醫以策と云ふものを、京都から下向させる。續いて二十二日には同じく執政三人の署名した沙汰書を持たせて、曾我又左衛門と云ふ侍を上使に遣す。大名に對する将軍家の取扱としては、鄭重を極めたものであつた。島原征伐が此年から三年前寛永十五年の春平定してから後、江戸の邸に添地を賜はつたり、鷹狩の鶴を下されたり、不斷懇懃を盡してゐた将軍家の事であるから、此度の大病を聞いて、先例の許す限の慰問をさせたのも尤もである。（P.311）

このように、忠利は大功を立てた大名として、徳川家に重視される臣下である。そして、徳川将軍は忠利のことを極めて手厚く扱うという描写から見れば、忠利と徳川家の君臣関係はよいといえる。それに対して、忠利が細川家の権力者として、忠利はどのような主君であろうか。次の文を見て見よう。

殉死を許した家臣の数が十八人になつた時、五十餘年の久しい間治亂の中に身を處して、人情世故に飽くまで通じてゐた忠利は病苦の中にも、つくづく自分の死と十八人の侍の死とに就いて考へた。（P.321）

聰明な忠利はなぜ彌一右衛門がさうなつたかと回想して見て、それは自分が爲向けたのだと云ふことに氣が附いた。そして自分の反

對する癖を改めようと思つてゐながら、月が累り年が累るに従つて、それが次第に改めにくゝなつた。(PP.327-328)

上の例文のように、忠利は「五十餘年の久しい間治亂の中に身を處して、人情世故に飽くまで通じてゐる」(P.322)た処世態度があり、「聰明な」(P.327)性格の持つ主君である。つまり、忠利は物事を観察し、素早く理解する能力も持っている主君と意味する。そして、作中に、忠利が岫雲院で休憩したエピソードがある。この場面での忠利の主君像は何であろうか。次の引用を見てみよう。

岫雲院で茶毗になつたのは、忠利の遺言によつたのである。いつの事であつたか、忠利が方目狩に出て、此岫雲院で休んで茶を飲んだことがある。その時忠利はふと腮髯の伸びてゐるのに氣が附いて住持に剃刀は無いかと云つた。住持が盥に水を取つて、剃刀を添へて出した。忠利は機嫌好く兒小姓に髯を剃らせながら、住持に云つた。「どうぢやな。此剃刀では亡者の頭を澤山剃つたであらうな」と云つた。住持はなんと返事をして好いか分からぬので、ひどく困つた。此時から忠利は岫雲院の住持と心安くなつてゐたので、茶毗所を此寺に極めたのである。(P.313)

このように、忠利は住持に剃刀をもらったときに、心の中で、これは亡者に戒を授けるときに髪を剃る剃刀かどうかという疑問が生じたため、住持に「どうぢやな。此剃刀では亡者の頭を澤山剃つたであらうな」

(P.313)と聞いた。住持はどのように返事した方がいいかに悩んでいるが、忠利は怒らず、さらに住持と親しくなったのである。このような場面に見えてくる忠利の姿は、冒頭文に描かれた將軍家に重視されている大名・藩主の姿と比べると、かなり優しい気分が感じられるのである。要するに、忠利は身分が高い主君であっても、物腰の柔らかい態度で周りの人と付き合える性格があつて、世間の人物、物事に優しく対応できる人間だといえる。

2.1 主君の立場から見る

徳川時代の細川藩の藩主である忠利が病死してから、細川家の政權は嫡子光尚に移転した。前節において、忠利の性格考察によると、忠利は人物や物事に対して優しい性格を持つ主君であることが分かる。そして、

このような優しい性格を持つ忠利は、嫡子光尚にどのように考えるのか。次の文を見てみよう。

いづれも忠利の深く信頼してゐた侍共である。だから忠利の心では、此人々を子息光尚の保護のために残しておきたいことは山々であつた。(P.321)

このように、忠利は自分がなくなった後、これらの者が嫡子光尚の保護をしてもらいたい気持ちがあるのである。ここから、親が息子に対する愛情が見られるのである。そして、忠利は政権交代について、どのような考え方があのか、次の例文を見てみる。

生あるものは必ず滅する。老木の朽枯れる傍で、若木は茂り榮えて行く。嫡子光尚の周囲にゐる少壯者共から見れば、自分の任用してゐる老成人等は、もうゐなくて好いのである。邪魔にもなるのである。自分は彼等を生きながらへさせて、自分にしたと同じ奉公を光尚にさせたいと思ふが、其奉公を光尚にするものは、もう幾人も出来てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない。(PP.321-322)

上の例文のように、忠利は木の生長循環を例として、殉死という儀式を通して、政権がスムーズに嫡子光尚に移転することができると、嫡子光尚の傍に奉公してきた臣下も出世できると考えている。そして、「奉公を光尚にするものは、もう幾人も出来てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない」(P.322)という考え方から見れば、主君としての忠利は主君となる嫡子に政権を移転することを考えている以外に、嫡子に奉公する臣下のことをも配慮したのである。従って、君臣関係における支配関係という視点から見れば、忠利は積極的に臣下のことを配慮する主君だといえる。続いて、忠利は自分が任用してきた家臣らのことに、どのように配慮するかを考察する。

2.2 臣下の立場から見ると

忠利が病気に罹っている間に、殉死要請を願った臣下が 19 名がいたのである。しかしながら、忠利は 19 人のうちに 18 人を許したが、1 人を許さなかったのである。この 1 人は彌一右衛門である。絶対権力を持っている主君としての忠利は、なぜ彌一右衛門に殉死許可を与えたくな

いか。そこで、忠利と彌一右衛門の君臣関係を考察する前に、忠利と殉死許可を与えた 18 名殉死者の君臣関係を見ることにする。

2.2.1 殉死許可が与えられた 18 名殉死者

忠利が殉死要請を許可した殉死者は 18 名がいる。忠利は最初に「此人々を自分と一しよに死なせるのが残酷だとは十分感じてみた」(P.321)ので、どの家臣にも殉死させたくなかった。しかしながら、家臣の涙や請求に堪えられなく、ついに「勢已むことを得なかつた」(P.321)という意念で自分を説得した。忠利が最後に意志を変えて、聴許することは、臣下の請求に影響されたのである。それは許可が得られない臣下がかわいそうと思ったからである。なぜ忠利は臣下の態度に影響され、許可を与えたのか。次の引用文を見てみよう。

長十郎が忠利の足を戴いて願ったやうに、平生恩顧を受けてみた家臣の中で、これと前後して思ひ思ひに殉死の願をして許されたものが、長十郎を加へて十八人あつた。いづれも忠利の深く信頼してみた侍共である。 (中略)

自分の親しく使つてみた彼等が、命を惜まぬものであるとは、忠利は信じてゐる。 (P.321)

以上の文から、忠利はこの 18 名の家臣は忠誠で奉公してきたものと信じていることが見られる。そして、忠利はこの 18 名の家臣と信頼関係が彼らの殉死要請を聴許したのである。従つて、忠利は家臣らの殉死要請を受け取る際に、家臣のことがかわいそうに思ったほかに、家臣との信頼関係も含めて配慮したのである。要するに、忠利はこれら殉死者の忠誠心を感じたので、主君としての自分は彼らの面倒を見て、彼らに対する良い決定を与えたのである。

一方、人物や物事に対する優しい性格を持つ忠利は、家臣らに殉死を許されない場合のことをも配慮したのである。次の文を見てみよう。

随つて殉死を苦痛とせぬことも知つてゐる。これに反して若し自分が殉死を許さずに置いて、彼等が生きながらへてゐたら、どうであらうか。家中一同は彼等を死ぬべき時に死なぬものとし、恩知らずとし、卑怯者として共に齒せぬであらう。 (P.321)

自分の任用したものは、年来それぞれの職分を盡して来るうちに、人の怨をも買つてみよう。少くも娼嫉の的になつてゐるには違ひない。さうして見れば、強いて彼等にながらへてゐると云ふのは、通達した考ではないかも知れない。(P.322)

このように、忠利はこれらの殉死要請者は「少くも娼嫉の的にな」(P.322)るので、もしを生き残させたら、家中に侮辱され、「恩知らず」(P.321)「卑怯者」(P.321)というレッテルを貼られることの可能性があると予想した。忠利は殉死されなかった家臣が「恩知らず」(P.321)「卑怯者」(P.321)とかの誹謗を受けることまで予想をしたことから見れば、忠利は慈悲心のある主君と見える。もう一度整理してみると、忠利は臣下に殉死許可を与える判断基準が二つの観点があつたのである。一つは、嫡子光尚の新政権を保護することである。もう一つは、生き残される家臣が対面する残酷さに思い至つたことである。忠利の殉死観について、秦行正は次のように論述している。

殉死者に憧れて喝采する群集心理は忠利に殉死の聴許を強請するとともに、殉死のお許しを得ずに生き残つた家臣に対しては、殉死の本意を疑わせる偽善的人物、あるいは主君の信頼を裏切る欺瞞的人物としてこれを断罪するというのである²。

秦行正は忠利が自らの殉死観を基にして、臣下に殉死を許可する一方、主君の殉死許可がもらえない家臣は、「偽善的人物」であり、「主君の信頼を裏切る欺瞞的人物」で断罪するような態度を説明した。論者は秦行正の論述に対して、疑問がある。果たして、忠利が殉死許可を与えなかった原因はこれであろうか。それから、忠利と殉死者らの折り合いを見ることにする。そこで、殉死許可を与えられた17歳の内藤長十郎を取り上げて見てみる。

長十郎はまだ弱輩で何一つ際立つた功績もなかつたが、忠利は始終目を掛けて側近く使つてゐた。酒が好きで、別人なら無禮のお咎もありさうな失錯をしたことがあるのに、忠利は「あれは長十郎がしたのでは無い、酒がしたのぢや」と云つて笑つてゐた。(P.317)

²秦行正(1999)『阿部一族』論(一)―その殉死観をめぐって』『福岡大学人文論叢』第31巻第1号 福岡大学総合研究所 P.774

上の文によると、長十郎は何も際立った功績がなく、不器用な家臣であるように見えるが、しかし忠利は長十郎のことを庇う気持ちが見られる。忠利はこれら 18 名の家臣は信頼関係があるので、殉死を聴許したのである。それで、長十郎の例から見れば、忠利が臣下に対する態度がさらに理解できると思う。山崎一穎は忠利が長十郎のことを庇う理由について、次のように述べている。

天亀天正の戦国時代と違って、戦のない時代に入ってくると、君臣の関係に甘えが入ってくる。長十郎には甘えがあり、またその甘えは、忠利の許容範囲にあった³。

このように、山崎一穎は「阿部一族」の時代背景から、長十郎と忠利の折り合いを推測したのである。ちなみに、「五十餘年の久しい間治亂の中に身を處して、人情世故に飽くまで通じてゐた忠利」(P.321) にとって、長十郎はまだ 17 歳の若者だから、このような君臣関係は祖父と孫のような関係に近いのであろう。それで、忠利が長十郎に対しては、孫をかわいがるようなところもあると言えよう。従って、君臣関係の視点から見れば、忠利と長十郎の相性がよく、酒が好きということも忠利の許容範囲以内で、忠利が長十郎のことを庇ったのである。ここまでは、殉死者に対する対応の考察である。以上分析した結果によれば、忠利が殉死者を許可した要因は、生き残される家臣が対面する残酷さに思いに至ることほかに、臣下との折り合いと信頼関係である。今まで述べてきたように、忠利と家臣の支配関係を中心に考察した結果では、忠利は個人の感情を基準にし、家臣の奉公態度と忠誠心を量ることがわかった。

2.2.2 殉死許可が与えられなかった臣下

忠利が殉死許可を与えなかった臣下は 1 人だけいる。その人は千百石の俸禄を拝領する家臣の彌一右衛門である。ここから、忠利が彌一右衛門に殉死許可を与えない理由を究明する。そこで、忠利と彌一右衛門の折り合いを見てみる。

一體忠利は彌一右衛門の言ふことを聴かぬ癖が附いてゐる。これは餘程古くからの事で、まだ猪之助と云つて小姓を勤めてゐた頃も、

³山崎一穎 (1996) 『『阿部一族』論—歴史の『自然』と歴史叙述』『日本近代文学会』第 54 巻 日本近代文学会 P.34

猪之助が「御膳を差し上げませうか」と伺ふと、「まだ空腹にはならぬ」と云ふ。外の小姓が申し上げると、「好い、出させい」と云ふ。(P.327)

以上の彌一右衛門と忠利の対話から見れば、彌一右衛門が奉公する際に、忠利は「彌一右衛門の言ふことを聴かぬ癖が附いてゐる」(P.327)ので、彌一右衛門のことがあまり気に入らないと分かった。忠利の態度によれば、忠利と彌一右衛門のコミュニケーションがよくないといえる。そして、このような忠利の行為について、語り手は次のように説明した。

人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある。そしてなぜ好きだか、厭だかと穿鑿して見ると、どうかすると補足する程の掘りどころが無い。忠利が彌一右衛門を好かぬのも、そんなわけである。(P.328)

以上語り手の説明によれば、好きと嫌いという気持ちは、単に人間としての能動的な心理反応である。それで、忠利は彌一右衛門のことがあまり好きではないのが、好悪という感情なものである。感情がある人間にとって、好悪という感情的なものは、相手との対応に影響を与える。それでは、忠利は彌一右衛門に対して嫌いという感情を抱き、どのように反応しているのか、次の引用文を見てみよう。

彌一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初めなんとも思はずに、只此の男の顔を見ると、反対したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。(P.327)

以上の引用文から分かるように、最初に忠利は彌一右衛門のことに対して、ただ気に入らないだけであつたが、彼のことを「憎い」(P.327)という能動的感情になつたのは、彌一右衛門が「意地で勤め」(P.327)ていることを知つたからである。一般的に、人間が人を嫌うという感情から、憎いという気持ちに変わる際、きっと何かきっかけがあり、怨みを含む感情に転換したことが推測できる。従つて、「男の意地」(P.327)という奉公態度には、きっと何か忠利が認められない感情であつて(を含め)、「男の意地で勤め」(P.327)る臣下の行為が憎くなつたのであ

る。前節にふれたように、忠利は臣下のことを配慮する主君である。それで、臣下のことを配慮する忠利は彌一右衛門が「意地ばかりで奉公していく」態度はどのように考えるのかを、次の文から見て見よう。

　　聡明な忠利はなぜ彌一右衛門がさうなつたかと回想して見て、それは自分が爲向けたのだと云ふことに気が附いた。そして自分の反対する癖を改めようと思つてゐながら、月が累り年が累るに従つて、それが次第に改めにくゝなつた。（PP.327-328）

　　このように、忠利は「此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた」（P.327）という理性的な面から、彌一右衛門のことを考えているとき、「自分が爲向けたのだ」（P.328）という自分が責任を担うべきであることに気が付き、反省した。小森美幸は、「忠利は乱世に育つて、洞察力に富みその洞察を生かして行動する理性を十分に持ち合わせている」⁴と忠利の行動原理を指摘した。確かに、人間の処世態度は自らの成長環境に大きな影響を受けるものである。それで、洞察力に富んだ忠利は彌一右衛門のことに気づいたのである。だが、忠利は彌一右衛門の態度に対して自分の責任があることを意識したが、改めたくても改めにくいという言葉で自分を説得したのである。つまり、忠利は理性的に物事を考えながら、反省できるという性格がある同様に、人間の惰性でやりたくない自分のことを正当化するような性格もあるのである。そこで、忠利は彌一右衛門の殉死要請を聞き、どのような反応があるのか。次の文を見てみる。

　　「そちが志は満足に思ふが、それよりは生きてゐて光尚に奉公してくれい」と、何度願つても、同じ事を繰り返して云ふのである。（P.327）

　　兎に角彌一右衛門は何度願つても殉死の許を得ないでゐるうちに、忠利は亡くなつた。亡くなる少し前に、「彌一右衛門奴は願と申すことを申したことはござりません、これが生涯唯一の願とござります」と云つて、ちつと忠利の顔を見てゐたが、忠利もちつと顔

⁴小森美幸（1988）『阿部一族』の世界』『日本文芸研究』第40巻第2号 日本文学会 P.35

を見返して、「いや、どうぞ光尚に奉公してくれい」と言ひ放つた。
(P.328)

彌一右衛門が何度も殉死願いを提出しても、忠利は「そちが志は満足に思」(P.327)って、「光尚に奉公してくれい」(P.327)と返答したのである。それは忠利がいつも彌一右衛門に対応した態度であるが、忠利の態度によると、彌一右衛門が光尚に奉公してほしい様子が見られるといえよう。忠利が臣下の殉死要請を受け入れるかどうかを考えると、語り手は忠利の心情については、次のように述べている。

いづれも忠利の深く信頼してゐた侍共である。だから忠利の心では、此人々を子息光尚の保護のために残しておきたいことは山々であつた。(P.321)

このように、忠利は彌一右衛門が深く信頼していた家臣なので、生き残させ、光尚に奉公させる目的が考えられるのである。しかも、忠利は「生あるものは必ず滅する。老木の朽枯れる傍で、若木は茂り榮えて行く」(PP.321-322)という政権交代の観念があり、生き残させた殉死者が家中に侮辱され、「恩知らず」(P.322)「卑怯者」(P.322)というレッテルを貼られる可能性があるかと予想し、その残酷さを感じたので、多くの家臣に殉死許可を与えたのである。確かに、忠利は彌一右衛門が「男の意地で勤める」(P.327)ということを知ってから、「憎い」(P.327)という能動的感情が生じそのことから見れば、忠利は殉死という制度を通して、自分の憎い気持ちから彌一右衛門を処置したいという考え方も通じるのである。しかし、そこは、重要なポイントである。彌一右衛門はこれらの殉死者と違って、「此男程精勤をするものは無く、萬事に氣が附いて、手ぬかりが無いから、叱らうと云つても叱りやうが無い」(P.327)という奉公態度で主君に仕える家臣であり、「誰でも立派な侍として尊敬はする」(P.328)武士である。従って、忠利は彌一右衛門のことが気に入らなくても、このような優秀な家臣を生き残させ、光尚に奉公してもらいたいことも考えられるのである。一方、彌一右衛門がこのような窮地に陥っても、「意地ばかりで奉公して行く」(P.327)という態度が変わるわけではないと考えられるのである。そのため、忠利は「光尚に奉公してくれい」(P.327)という理由で、彌一右衛門の殉死要請を断つたのである。つまり、忠利は彌一右衛門に憎い感情を持っていても、

彌一右衛門が信頼できる家臣なので、生き残させ、光尚を奉公するという論点が成立できる。秦行正が指摘した忠利が許可を与えなかった殉死要請者が「偽善的人物」「主君の信頼を裏切る欺瞞的人物」という論述は成立できないのである。

ここまで、考察した忠利の主君像について、藤本千鶴子は、次のように指摘した。

忠利は、光尚の保護のため、残酷さのため、殉死させたくないと感じていた。殉死の非道性に気づくだけの聡明さを自己確認するのである。だが最終的には物事の道理ではなく、家来の涙や「気合い」に押し切られ、世論の大勢に押し流され、「勢己むことを得なかった」と自分を許す。人にも甘い自分にも甘いのである。そして、生者必ず滅つ・盛者必衰の無常感にこと寄せ、気に入っていたものたちが世の怨みやそねみの的になることから救い出して、あの世へ送ってやることこそ「慈悲」かもしれないと、まるで自分が阿弥陀仏であるかのような自己弁護をする。この「慈悲」は、無責任とすり替えで成立になっている。自分の責任による人為の殉死を自然死とすり替え、十七歳の若者を老木と言ひ、不正な嫉妬を断乎禁じる策を講じない。作品は一見主観をさまざま全能視点で描かれていると見えるが、「気」で動く人情家に対してかなり皮肉な観察がされている⁵。

このように、藤本千鶴子は「気」という視点から、忠利の主君像を批判するのである。そこで、藤本千鶴子が定義した「気」を次のように説明している。

「気」は、心の底にある「情」から出ている、目に見えない触手のようなものである。行動を決定する場合、物事の道理ではなく、最終的に相手や周囲の「気」に合わせ（大勢に従い）、「やむを得なかった」と思う人間のタイプがある。彼らは時間的には、全身的な「勘」を働かせて「機」をとられる、「間」型である⁶。

⁵藤本千鶴子（1989）『『阿部一族』論－『気』と『意地』のドラマ』『竹盛天雄編 別冊国文学 森鷗外必携』学燈社 第37巻 P.65

⁶藤本千鶴子（1989）『『阿部一族』論－『気』と『意地』のドラマ』『竹盛天雄編 別冊国文学 森鷗外必携』学燈社 第37巻 P.62

このように、藤本千鶴子が定義した「気」とは心の底にある「情」であることが分かった。心の底にある情とは人間として生まれて育った本性ではないか。その人間としての本性は人間性と呼ぶ。一般的に、人間性といえ、孟子が唱えた「性善説」と荀子が唱えた「性悪説」という二種類がある。藤本千鶴子が指摘した忠利の主君像には、忠利は慈悲な表面に虚偽なものが潜んでいる意味が見られ、本心本意ではないと批判することが思われる。主君は主君としても、人間なりの感情があり、主君になっても、人間性としての慈悲な性格は無くなるはずがない。そして、今までに考察した忠利の人物像には、忠利はほとんど周囲の人々に親しい関係があり、ただ彌一右衛門は例外である。もし人間の感情である「人には誰が上にも好きな人、厭な人と云ふものがある」(P.328)という視点から見れば、忠利と彌一右衛門は互いの人間性の相剋だけである。虚偽な性格までにはいかないのである。さらに、今まで分析した結果によると、忠利は確かに主君としての責任を取り、全般的に配慮する主君である。なぜならば、忠利は臣下の殉死することと政権交代することを全般的に配慮したからなのである。それで、藤本千鶴子の論述に完全に賛成できない。藤本千鶴子の論述のほかに、忠利の主君像については、秦行正は異なった意見を次のように指摘した。

忠利は君臣らの殉死の願い出を取り捌く権力者ではあろうが、その役目は、自らの権力圏を解体して嫡子光尚に政権を移譲する儀式としての主宰者であったといえる。つまり忠利もまた、家臣と同様に殉死の慣習に呪縛されて、不本意ながらも家臣に殉死の許可をあたえる悲劇的人物の一人として設定されている。従って忠利の役回りは、慣習としての殉死が含み持つ政治的・社会的呪縛力を明視する人として位置づけされていることに留意する必要がある⁷。

引用のように、秦行正は忠利が自らの勢力圏を解体して、政権を嫡子光尚に移転する主宰者であり、悲劇的人物だと称するのである。忠利が政権交代の主宰者であることという言い方に賛成するが、悲劇的な人物という言い方は違った意見がある。忠利が政権交代を考えると、確かにそれは秦行正が指摘したように、自らの権力圏を解体して、嫡子光尚に政権を移転させるのである。だが、忠利が政権交代について考えると

⁷秦行正(1999)『阿部一族』論(一)―その殉死観をめぐって』『福岡大学人文論叢』第31巻第1号 福岡大学総合研究所 PP.772-773

きに、嫡子光尚のことだけではなく、光尚に奉公してきた家臣のことも含めて配慮したのである。従って、主君としての忠利は自らのことを考えるだけでなく、積極的に周囲の人々、物事に配慮できる主君だといえる。それで、単に政権交代で、忠利が悲劇的人物であると判断するのは適切ではないと思われる。忠利は思慮することができる主君であり、新政権に新勢力を与える主君だと思われる。

ここまでに、忠利の主君像を考察した結果を通して、忠利は人情世故について豊かな人生経験を持ち、物事に対して寛大な態度で処置する性格の持ち主である。そして、忠利の殉死観によると、忠利は明理的に物事を配慮する主君だといえる。



第三節 完璧主義の阿部彌一右衛門

前節の分析によれば、忠利の立場から、彌一右衛門に殉死要請を許可を与えない理由と忠利の主君像を明らかにした。本節では、彌一右衛門の立場から、忠利との君臣関係における支配関係を考察する。彌一右衛門と忠利との支配関係をさらに究明する一方、彌一右衛門の武士像も明らかにする。

3.1 武士の殉死の掟について

秦行正は「江戸時代・寛文年間の武士社会では、すでに自律的・内発的な殉死の道徳が慣習化して、他律的・功利的な殉死観の萌芽が認められるという歴史認識を標榜している」⁸と「阿部一族」における歴史背景を説明した。従って、武士の殉死は主君の同意の上で行うことは、功名のための行動であると言えよう。そこで、作中に描写されている殉死の掟の内容を見てみる。

どれ程殿様を大切に思へばと云つて、誰でも勝手に殉死が出来るものではない。泰平の世の江戸参勤のお供、いざ戦争と云ふ時の陣中へのお供と同じ事で、死天の山三途の川のお供をするにも是非殿様のお許を得なくてはならない。その許もないのに死んでは、それは犬死にである。武士は名聞が大切だから、犬死はしない。敵陣に飛び込んで討死するのは立派ではあるが、軍令に背いて拔駈をして死んでは功にはならない。 (PP.314-315)

以上のように、「阿部一族」において、武士は主君に対する気持ちがどんなにあっても、主君から殉死の許可を貰わなければならないという掟がある。それに、主君の許可がないのに殉死することは、犬死になるので、名聞を大切にしている武士は、勝手に殉死しない。要するに、武士にとって主命は大切なものである。従って、名聞を重んじる武士は、主君の許可がない殉死することと犬死とみられることはその故である。しかし、主君の許可がない殉死にも、たまに例外がある。それは、次の通りである。

⁸秦行正(1999)『阿部一族』論(一)―その殉死観をめぐって』『福岡大学人文論叢』第31巻第1号 福岡大学総合研究所 P.765

偶にさう云ふ人で犬死にならないのは、値遇を得た君臣の間に黙契があつて、お許はなくてもお許があつたのと變らぬのである。佛涅槃の後に起つた大乘の教は、佛のお許はなかつたが、過現未を通じて知らぬ事の無い佛は、さう云ふ教が出て来るものだと知つて懸許して置いたものだとしてある。お許が無いのに殉死の出来るのは、金口で説かれると同じやうに、大乘の教を説くやうなものであらう。

(P.315)

上の引用文から見れば、「値遇を得た君臣の間に黙契」があれば、主君の許可を得ずに殉死することは、犬死にならないのである。従つて、「自然に掟が出来てゐる」(P.314)という掟とは、武士と主君の黙契によつて、あえて主君の許可を得ずに殉死してもよいという意味がある。つまり、もし彌一右衛門と主君の間に黙契があれば、個人の意志で殉死しても、犬死にならないわけである。

3.2 彌一右衛門の殉死に対する考え方

忠利がこの世を去る前に、彌一右衛門が殉死要請を忠利に提出した。そこで、彌一右衛門は殉死要請を申し出た理由を見てみよう。

夙くから忠利の側近く仕へて、千百石餘の身分になつてゐる。島原征伐の時、子供五人の内三人まで軍功によつて新知二百石づゝを貰つた。この彌一右衛門は家中でも殉死する筈のやうに思ひ、當人も亦忠利の夜伽に出る順番が来る度に、殉死したいと云つて願つた。

(P.327)

以上の文のように、彌一右衛門は忠利の世話になつて以来、自分が千百石の身分になり、子供たちさえも軍功によつて忠利から賞賛された。そして、彌一右衛門はこの恩に報いることが必要と意識したので、忠利に殉死要請を申し出た。即ち、彌一右衛門は主君の愛護を受けてから、自分の心にあつた能動的な感謝の気持ちが働き、殉死要請を申し出たのである。主君の恩に報いたい気持ちを持つ彌一右衛門はどのような性格の持ち主のかを、次の例文から見てみよう。

併し彌一右衛門と云ふ男はどこかに人と親み難い處を持つてゐるに違ひ無い。それは親しい友達の少いので分かる。誰でも立派な侍として尊敬はする。併し容易く近づかうと試みるものが無い。稀に

物數奇に近づかうと試みるものがあつても、暫くするうちに根氣が續かなくなつて遠ざかつてしまふ。まだ猪之助と云つて、前髪のあつた時、度々話をし掛けたり、何かに手を借して遣つたりしてゐた年上の男が、「どうも阿部には付け入る隙が無い」と云つて我を折つた。そこらを考へて見ると、忠利が自分の癖を改めたく思ひながら改めることの出来なかつたのも怪むに足りない。

(P.328)

上の「彌一右衛門と云ふ男はどこかに人と親み難い處を持つてゐるに違ひ無い」(P.328)と「どうも阿部には付け入る隙が無い」(P.328)という性格描写によれば、彌一右衛門は周囲の人々と距離感を置き、自分の意見や考え方を誰にも言わない武士であることが分かった。いわばこのような孤高な性格を持っている彌一右衛門は円滑な人間関係をつくれぬ武士だといえる。従つて、感情的な主君である忠利の歓心が得られない事も推測できるのである。そこで、彌一右衛門の忠利に奉公する態度を見てみよう。

そんなら叱られるかと云ふと、さうでも無い。此男程精勤をするものは無く、萬事に氣が附いて、手ぬかりが無いから、叱らうと云つても叱りやうが無い。(P.327)

上の文によると、彌一右衛門は「萬事に氣が附いて、手ぬかりが無」(P.327)くて、完璧を目指す武士だと見られる。それで、前述した忠利は、彌一右衛門が信頼できる家臣なので、生き残させたのである。また、忠利が殉死要請を申し出た家臣に対する考え方では、忠利は「自分の任用したものは、年來それぞれの職分を盡して來るうちに、人の怨をも買つてゐよう。少くも娼嫉の的になつてゐるには違ひない」(P.322)ということに心配し、殉死者に許可を与える基準の一つとして配慮したのである。従つて、彌一右衛門は忠利が思った通りで、「人の怨をも買つてゐよう。少くも娼嫉の的になつてゐるには違ひない」(P.322)武士であろうか。彌一右衛門は家中に嫉妬されることもあるのであろうか。彌一右衛門は奉公しているときに、同僚の折り合いはどうであらうか、次の文を見てみる。

彌一右衛門は外の人と言ひ付けられてする事を、言ひ付けられずにする。外の人の上申してする事を申し上げずにする。併しする事はいつも肯綮に中つてゐて、間然すべき所が無い。彌一右衛門は意地ばかりで奉公して行くやうになつてゐる。忠利は初めなんとも思はずに、只此の男の顔を見ると、反對したくなつたのだが、後には此男の意地で勤めるのを知つて憎いと思つた。(P.327)

上の文によれば、彌一右衛門は外の人（主君忠利以外の人である。）の請求や言い付けに妥協せずにもたまたま聞く耳をもたず、個人の意欲に従つて行動する武士であることが分かつた。つまり、彌一右衛門はただ主君の命令や言い付けを服従するだけの奉公態度で処世するのである。このような個人の主張を中心に考える処世態度は、家中の者で孤立し敬遠されることは容易に想像できる。それに、「男の意地」（P.327）という叙述から見れば、彌一右衛門は個人の主張を堅持し、行動を取る武士であることが分かつた。

3.3 彌一右衛門は殉死に対する考え方

前節の考察によると、彌一右衛門は忠利の命令や言いつけることに服従して、手抜かりない武士であることが分かつた。従つて、個人の主張であり、主命を優先的にするという奉公態度を意識していたのため、忠利の遺言に服従して光尚に奉公するのである。ところが、語り手は忠利が政権交代について考えている際に、光尚に奉公してきた家臣らのことを配慮した一方、生き残された家臣に対することも次のように予測したのである。「その恩知らず、その卑怯者をそれと知らずに、先代の主人が使つてゐたのだと云ふものがあつたら、それは彼等の忍び得ぬ事であらう。彼等はどんなにか口惜しい思をするであらう」（P.321）という忠利の考え方を通してみると、彌一右衛門はどんなに辛い立場にあらうか。このような残酷な現実には直面しなければならない彌一右衛門は、どのように思うか次の文を見てみよう。

彌一右衛門はつくづく考へて決心した。自分の身分で、此場合に殉死せずに生き残つて、家中のものに顔を合せてゐると云ふことは、百人が百人所詮出来ぬ事と思ふだらう。犬死と知つて切腹するか、浪人して熊本を去るかの外、爲方があるまい。だが己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無く

なる筈は無い。かう思つて一日一日と例の如くに勤めてゐた。
(PP.328-329)

以上の文から見れば、彌一右衛門が生き残された後、家中に直面する問題を配慮したが、しかし彼は依然として、個人の主張を堅持し、「己は己だ」(P.329)と自分を説得し、犬死の殉死や浪人のように去るなどもしないままに生き残った。それに対して、佐々木充は以下のように指摘している。

かくて忠利は死に、彌一右衛門は、殉死という、おのれにおける最大の〈主のため〉を発揮する機会を、永遠に失った、逆に彼は、〈主命大切〉の故に、生き続けなければならぬのである⁹。

佐々木充が指摘したように、彌一右衛門は「主のため」から「主命大切」に考えを変え、生き残ったのである。佐々木充の論述に賛成しない。なぜならば、今までの分析した結果によれば、忠利が活着している際に、彌一右衛門は主命以外のことに無関心な態度で対応していたことが分かった。それで、主命を果たすということはただ彌一右衛門の意地で奉公していく態度であり、忠誠心を持つことや主君至上のような気持ちが見られないのである。従って、生き残された彌一右衛門にとって、忠利に奉公する機会がなくても、「武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い」(P.329)という信念を堅持すれば、当代主君光尚に仕えるのも良いと考えているのである。つまり、彌一右衛門の個人の主張によれば、世俗の観念への挑戦する態度が見られるのである。そして、「己は己だ」と前述した「意地ばかりで奉公して」いくという個人の主張は共に固執的な態度で自分の意念を通そうとしたのである。従って、彌一右衛門は主命に服従するのが主君への忠誠心ではなく、個人の主張だといえる。彌一右衛門の個人の主張について、相原和邦は次のように説明した。

「主」の意向から切り離れたところで、なお、独立した「立場」があるというのは、前近代的主従関係を前提とした社会には、本来ありえない原理である。これを戦国時代のいわゆる反対結付の主張

⁹佐々木充(1979)『阿部一族』論一〈自律〉ということ『国語と国文学』第56巻第8号 東京大学国語国文学会編集 至文堂 P.31

の名残りとする見解も成り立たないわけではない。だが、個人の思惑から自立した「公」の概念の確立は、むしろきわめて「近代」的原理だというべきであろう¹⁰。

このように、相原和邦は彌一右衛門の個人の主張のが、前近代的主従関係を前提とした社会や反対結付の主張の名残りとする見解も成り立たないわけではない戦国時代でははく、個人の思想が意識し始めた「近代」的な産物である。論者は相原和邦の論述に賛成する。これは、明治時代を生きてきた鷗外が時代の影響を受け、新時代産物である個人主義観念を歴史小説に注いだ人間像を造形するのである。ちなみに、鷗外は『意地』の広告文に、次のように述べている。

「意地」は最も新らしき意味に於ける歴史小説なり、従来の意味に於ける歴史小説の行き方を全然破壊して、別に史實の新らしき取扱ひ方を創定したる最初の作なり。其の観察の點に於て、其の時代の背景を描くの點に於て、殊に其の心理描寫の點に於て、読者は必らず此の作に或る驚くべき新意を見出さん¹¹。

このように、鷗外は『意地』三部作が「別に史實の新らしき取扱ひ方を創定したる最初の作なり」と述べてきた。従って、鷗外の創作意識として、個人の主張がある彌一右衛門の人間像を造形するのである。そして、彌一右衛門は当時の環境や時代を無視し、処世態度や殉死に対する考え方は、いつものように個人の主張で堅持していくのである。

3.4 殉死するまでの心境変化

彌一右衛門は、「己は己だ。好いわ。武士は妾とは違ふ。主の氣に入らぬからと云つて、立場が無くなる筈は無い」(P.329)という個人の主張を堅持し、忠利の遺言に従い、いつものように勤めてきた。そして、彌一右衛門は出勤する際に、家中の異様な視線をあびせられても、「己は命が惜しくて生きてゐるのでは無い、己をどれ程悪く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさかに云ふ事が出来まい」(P.329)と自分が命の惜しい男ではないと強調し、自分が命を惜しむ男だとは言われるわけがない

¹⁰相原和邦(1979)『阿部一族』の構成』『日本文学』第28巻第12号日本文学協会 P.40

¹¹森林太郎(1975)『鷗外全集』第38巻 岩波書店 P.268

と自分を説得しようとしたのである。しかしながら、二、三日が経った後、思い掛けないことが起こった。彌一右衛門はある噂を耳にしたのである。その噂の内容は次の通りである。

誰が言ひ出した事か知らぬが、「阿部はお許の無いを幸に生きてみると見える、お許は無うても追腹は切られぬ筈が無い、阿部の腹の皮は人とは違ふと見える、瓢箪に油でも塗つて切れば好いに」と云ふのである。(P.329)

このように、噂の内容は、「己をどれ程悪く思ふ人でも、命を惜む男だとはまさかに云ふ事が出来まい」(P.329)と予想したことが意外な方向へ進んだのである。彌一右衛門はこの噂を聞く前に、自分が主君に殉死を許されないということに対して、冷静に自分を説得してきた。そして、秦行正は彌一右衛門が家中に侮辱された原因について、次のように指摘した。

殉死のお許しを得るという社会的慣習に固執する彌一右衛門は、祝祭的興奮の坩堝と化して殉死者を担ぎ回る風俗的慣習には冷淡な規範的人物であった。従って殉死が主君に忠誠の証をたてる個人的・道徳的行為である反面において、政権交替を象徴する政治的儀式でもあったという政治的慣習としての認識に欠けていた¹²。

引用のように、秦行正は彌一右衛門が殉死という風俗の慣習と政権交替という政治の慣習の認識に乏しいことが家中に侮辱された原因だと指摘した。論者は秦行正の論述に同感がある。そして、彌一右衛門がこれらの慣習の認識に乏しい外に、もう一つの原因があるのである。それは、彌一右衛門の孤高な性格といつも周囲に対する無関心な態度であった。このため、家中のものがこの殉死事件を通して、殉死できなかった彌一右衛門に呵責したいのである。この噂を耳にした彌一右衛門は、次のように反応を現した。

彌一右衛門は聞いて思ひの外の事に思つた。悪口が言ひたくばなんと云ふが好い。併し此彌一右衛門を豎から見ても横から見ても、

¹²秦行正(1999)『阿部一族』論(二)―その悲劇の構造をめぐって(上)』『福岡大学人文論叢』第31巻第2号 福岡大学総合研究所 P.1585

命の惜しい男とは、どうして見えようぞ。げに言へば言はれたものかな、好いわ。そんなら此腹の皮を瓢箪に油を塗つて切つて見せう。
(P.329)

このように、家中の異様な視線にあびせられたとき、自分が家中に命が惜しい男だと言われるわけがないことに自信満々で、自分を説得したのである。だが、結果は予想を反して、本当に言われたのである。そのため、自分が命の惜しい男であることを認めなければならないので、追腹を決意したのである。小森美幸は、「『阿部一族』の中で『噂』は、本来の自己でない虚像を個人に強いる圧力として描かれる。その押しつけられた虚像を砕くために、彌一右衛門は切腹する」¹³と指摘した。小森美幸の論述に賛成する。命の惜しい男だけは彌一右衛門の実像ではない。彌一右衛門は「萬事に氣が附いて、手ぬかりが無」(P.327)くて、完璧さを目指す性格がある武士であり、個人の主張で生きてきた武士でもあるなので、名誉を侮辱されたら、どうしても名誉を取り戻したい性格があると考えられるのである。それで、犬死でも甘んじて切腹するのである。彌一右衛門は主命に服従することから、追腹することを決意するまでの心境変化から見れば、彌一右衛門の個人の主張が見られる一方、恥を雪ぐために死ぬことで証明する勇気も見られるのである。

3.5 殉死を決意した彌一右衛門

犬死をしなくて生き残ることより、自分が命が惜しい武士ではないことを証明することの方が大切だと思った彌一右衛門は、息子たちを集め、遺言を言い付けることにする。彌一右衛門が息子に話した言葉の内容は、次のようである。

一座を見渡した主人が口を開いた。「夜陰に呼びに遣つたのに、皆好う來て呉れた。家中一般の噂ちやと云ふから、おぬし達も聞いたに違ひない。此彌一右衛門が腹は瓢箪に油を塗つて切る腹ちやさうな。それちやによつて、己は今瓢箪に油を塗つて切らうと思ふ。どうぞ皆で見届けてくれい。」(P.330)

¹³小森美幸(1988)「『阿部一族』の世界」『日本文芸研究』第40巻第2号 日本文学会 P.40

以上の文によると、息子たちに話した内容から見れば、彌一右衛門は家中の評価が気になる態度が見られる。そして、この話を聞いた息子の三男市大夫は次のように返事したのである。

なる程。好う分かりました。實は傍輩が云ふには、彌一右衛門殿は御先代の御遺言で續いて御奉公なさるさうな。親子兄弟相變らず揃うてお勤めなさる、めでたい事ぢやと云ふのでござります。其詞が何か意味ありげで齒痒うござりました。 (P.330)

このように、市大夫は父彌一右衛門が主君の殉死の許可を得られず、結果的に生き残ったことを気にしていた様子が見られる。それに、市大夫の話から見れば、市大夫の傍輩は彌一右衛門が殉死できなかった事で、市大夫のことを軽蔑した態度を取っていたことが分かった。つまり、彌一右衛門が殉死できず、生き残ったことは、息子たちに悪影響をもたらしていたのである。市大夫の発言に対して、彌一右衛門は次のように返事したのである。

さうであらう。目の先ばかり見える近眼共を相手にするな。そこでその死なぬ筈の己が死んだら、お許の無かつた己の子ぢやと云うて、おぬし達を侮るものもあらう。己の子に生まれたのは運ぢや。せう事が無い。恥を受ける時は一しよに受けい。兄弟喧嘩をするなよ。さあ、瓢箪で腹を切るのを好う見て置け。 (P.331)

このように、父としての彌一右衛門は「己の子に生まれたのは運ぢや」(P.331)と消極な面から、息子を慰めたのである。そして、息子たちに「恥を受ける時は一しよに受けい」(P.331)と「兄弟喧嘩をするなよ」(P.331)という遺言を息子たちに言い残し、追腹した。

ここまで、彌一右衛門の臣下像を考察した結果、彌一右衛門は臣下として、主君の愛護を得なくても、主命を果たそうとする気持ちや主君の恩に報いたい気持ちを持つ武士であることがわかる。そして、彌一右衛門は、主命至上という奉公態度で、忠利の信頼を貰い、生き残されたのである。生き残された彌一右衛門は主命を服従することが優先的に考えるが、家中の批判により、個人の面目を守るために、追腹した。彌一右衛門の殉死から見れば、彌一右衛門は忠誠心があるように見えるが、本

当は、自分の主張を重視する武士であり、完璧さを追求する武士だといえる。



第四節 絶対権威を持つ細川光尚

4.1 光尚の性格

忠利の病死によって、細川家の家督は嫡子光尚が相続し、新しい権力圏も政権交代に従って生み出された。新勢力圏において、光尚と阿部家の関係はどうであろうか。まず、光尚の性格についての描写を見てみよう。

光尚も思慮ある大名であつたが、まだ物馴れぬ時の事で、(中略)
まだ二十四歳の血氣の殿様で、情を抑へ欲を制することが足りない。恩を以て怨に報いる寛大の心持に乏しい。(PP.333-335)

以上の文のように、光尚は物事に対する配慮があるが、まだ若く、世俗に対する体験も少ないため、自己の感情に対する管理能力が足りず、臣下の錯誤への度量が乏しいものである。それで、光尚の物事に対する未成熟な態度と父忠利の「人情世故に飽くまで通じてみた」(P.321) 処世態度に違いがあるといえる。このような性格を持つ光尚は、細川家の家督として、家臣にどのように対応するのか。そこで、光尚の殉死者の遺族に対する態度を見てみよう。

4.2 光尚の殉死者の遺族に対する態度

忠利が病死した際に、合計 19 名の殉死要請者がいた。まず、光尚が忠利の殉死許可を得た殉死者の遺族に対する処置を見てみる。

五助は身分の軽いものであるが、後に殉死者の遺族の受けた程の手當は、跡に残つた後家が受けた。(中略)

殉死の侍十八人の家々は、嫡子にその儘父の跡を繼がせられた。嫡子のある限りは、いかに幼少でもその數には漏れない。未亡人、老父母には扶持が與へられる。家屋敷を拝領して、作事までも上から向けられる。先代が格別入懇にせられた家柄で、死天の旅の御供にさへ立つたのだから、家中のものが羨みはしても妬みはしない。

(PP.326-332)

このように、光尚は主君の許可を貰った 18 名殉死者の遺族に手厚い対応をしたのである。そのうち、身分が低く忠利の犬牽の役を担った五助の遺族さえも、他の遺族と同じ待遇を受けたのである。光尚は父忠利の許可を得ずに、追腹した彌一右衛門に対する処置はどう言うものであ

ろうか。次の文を見てみよう。

上では彌一右衛門の遺骸を靈屋の側に葬ることを許したのであるから、跡目相續の上にも強ひて境界を立てずに置いて、殉死者一同と同じ扱をして好かつたのである。さうしたなら阿部一族は面目を施して、擧つて忠勤を勵んだのであらう。(PP.333-334)

このように、光尚は阿部家の遺族のことを配慮した上で、父忠利の殉死許可を得ずに勝手に追腹した彌一右衛門がほかの 18 名殉死者と同じ扱いをしたのである。このような処置を通して、阿部家の面目を施しながら、阿部家の遺族が主家に忠勤することに励む目的がある。光尚の彌一右衛門に対する処置から見れば、光尚は阿部家が自分に忠誠してもらいたい気持ちがあると推測できる。従って、光尚は家臣が自分に忠誠を誓うことを重視する主君だといえる。それに対して、忠利の許可を得ずに、自殺した彌一右衛門の遺族はどうであろうか。次の文を見てみる。

然るに一種變つた跡目の處分を受けたのは、阿部彌一右衛門の遺族である。嫡子權兵衛は父の跡をその儘繼ぐことが出来ずに、彌一右衛門が千五百石の知行は細かに割いて弟達へも配分せられた。(PP.332-333)

上述した文のように、光尚は他の遺族に手厚い待遇を受けさせたことに対して、嫡子の權兵衛に父の知行の弟たちを分割相続させた。この前に、光尚の彌一右衛門に対する処置は、阿部家の遺族に自分に忠誠を誓い奉公してもらいたいという動機があるのだが、なぜ阿部家の遺族はほかの殉死者の遺族と異なった対応を施したであろうか。それは、光尚は林外記という臣下の献策を用いたからなのである。この「小才覺がある」(P.333) 林外記は、「阿部彌一右衛門は故殿様のお許を得ずに死んだのだから、眞の殉死者と彌一右衛門との間には境界を附けなくてはならぬと」(P.333) いう言い訳があるので、阿部家に差別待遇をつけることが必要であることを光尚に献策したのである。林外計の献策の故で、阿部家の未来も意外な方向へと展開していくことになったのである。ところが、なぜ光尚はこの献策を受け入れたのか、次の文を見てみる。

光尚も思慮ある大名であつたが、まだ物馴れぬ時の事で、彌一右衛門や嫡子権兵衛と懇意でないために、思遣が無く、自分の手元に使つて馴染のある市太夫がために加増になると云ふ處に目を附けて、外記の言を用ゐたのである。（P.333）

以上の文を見れば、光尚が林外計の献策を用いた理由は二点あると思われる。第一、光尚と彌一右衛門や権兵衛と親しんでいないという事、第二、自分の手元に使つてきた市太夫のために知行を増やしてやりたいという事なのである。つまり、光尚は林外計の献策を聞いた後、ある感情が蘇え、自らの感情に支配され、結果的に阿部家の遺族に対する扱い方を決めたのである。光尚の態度から、光尚の自分が任用した家臣への思いやりも見えるが、しかし光尚は阿部家の家督としての権兵衛の気持ちを配慮せず、単に互いの折り合いよしあしに従つて、この対応を決めるといふ態度から見れば、主君がすべき公平無私という原則を破つたのである。光尚の処置に対して、作中の語り手は「政道は地道である限は、咎の歸する所を問ふものは無い。一旦常に變つた處置があると、誰の捌きかと云ふ詮議が起る」（P.333）という評判があつたのである。光尚は主君としての公正さに欠け、感情で公務を処置する態度は、自分に何かを招いたのか。その前に、まず、権兵衛の態度をみることにする。

4.3 権兵衛の主張に対する処置

光尚の彌一右衛門の遺族に対する処置は、嫡子権兵衛はなかなか受け入れられないようである。従つて、権兵衛は忠利の一周忌に霊前で、光尚や衆人の前で、「脇差の小柄を抜き取つて髻を押し切つて、位牌の前に供へた」（P.334）ということを通して、自分の不満を表明したのである。光尚は権兵衛の行為に対して、どう思うのか。次の文を見てみる。

権兵衛の答を光尚は聞いて、不快に思つた。第一に権兵衛が自分に面當がましい所行をしたのが不快である。次に自分が外記の策を納れて、しなくても好い事をしたのが不快である。まだ二十四歳の血氣の殿様で、情を抑へ欲を制することが足りない。恩を以て怨に報いる寛大の心持に乏しい。即座に権兵衛をおし籠めさせた。（P.335）

上述した文のように、光尚は権兵衛の話を聞いて「不快」(P.335)極まる心情であった。この「不快」(P.335)な感じを引き起こした要因に、次の二つが考えられる。第一に、権兵衛の行為を非難的にみるからこそ起こる気持ちと、第二に、自分が外記の策を納れしなくてもいい事をした事を後悔する気持ちである。一つは相手の所為を責めるのことで、もう一つは、自身の所作を反省することになる。つまり、光尚は自分が林外計の献策を採用しなかったならば、権兵衛にこのような態度を取られなかったことを考えたのである。一体、林外計はなぜこのような差別があることを光尚に献策したのか。そこで、作中に、語り手が叙述した林外計の人物像を見てみる。

小才覺があるので、若殿様時代のお伽には相應してゐたが、物の大體を見る事に於ては及ばぬ所があつて、兎角苛察に傾きたがる男であつた。(P.333)

語り手の叙述によると、林外計は物事の全体を十分に配慮しておらず、細かい点に深く入り込んで、人のことを干渉しようとする男だと分かった。しかし、なぜ阿部家の遺族にこのような献策をしたのか。忠利の殉死観には、「嫡子光尚の周圍にゐる少壯者共から見れば、自分の任用してゐる老成人等は、もうゐなくて好いのである。邪魔にもなるのである。自分は彼等を生きながら得させて、自分にしたと同じ奉公を光尚にさせたいと思ふが、其奉公を光尚にするものは、もう幾人も出来てゐて、手ぐすね引いて待つてゐるかも知れない」(P.322)という配慮があつたのである。権兵衛は先代主君忠利が任用してきた家臣であるが、林外記は当代主君が任用した家臣である。それに、上述した林外記の処世態度からみると、権兵衛という親しくない同僚は邪魔ものと見なし、消したいという意念があるので、光尚に分割りという献策をしたことが考えられるのである。つまり、林外計が自分の偏見で、主君の光尚を支配し、主君光尚も自分の感情で権兵衛を支配したのである。主君の不公平な処置に支配された権兵衛は、我慢できず、ついに忠利の一周忌に自分の不満を表明したのである。

一方、権兵衛に皮肉を言われ主君としての面目を失った光尚は、次のように反発したのである。

天祐和尚が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部権兵衛を井手の口に引き出して縛首にさせた。先代の御位牌に對して不敬な事を敢てした、上を恐れぬ所行として處置せられたのである。(P.336)

上述した文から見れば、まだ若く「恩を以て怨に報いる寛大の心持に乏しい」光尚は、主君として、権力者としての面目を取り戻したいために、武士に侮辱な処罰である「縛首」を処刑したのである。光尚の権兵衛の処罰から見れば、光尚は臣下の反逆行為に刺激され、絶対権力を使って厳しい対応をしたのである。このように、光尚と権兵衛の君臣関係はこれで終わりにするのである。つまり、遺族の行為に反感を買い、その反感が光尚の判断に影響を与えた。それから、光尚が阿部家に討伐することを決意した原因を見てみよう。

阿部一族は妻子を引き纏めて、権兵衛が山崎の屋敷に立て籠つた。隠ならぬ一族の様子が上に聞えた。横目が偵察に出て來た。山崎の屋敷では門を嚴重に鎖して静まり返つてゐた。市太夫や五太夫の宅は空家になつてゐた。(P.337)

上に引用した文のように、光尚は阿部家の遺族の反逆行為を知った上で、反発することに決意したのである。つまり、光尚は阿部家の遺族の行為に影響され、主家に忠誠心がない武士を討手するという処分に対応したのである。

以上の分析によれば、光尚は阿部家の遺族との間には、いつも相手の影響を受けてから、行動を取るのである。阿部家の知行を分割すること、権兵衛を縛首にすること、乃至阿部家への討伐することまで、光尚は林外計や阿部家の遺族の行為に影響されたのである。自分の任用してきた家臣をおもいやる主君であるが、もし臣下は異心がある場合には、激しい政治的な手段で臣下を処置する主君である。

要するに、主君光尚は父忠利の性格と違い、寛大な器量に乏しいのである。自分の任用してきた家臣を思い遣る主君であるが、もし臣下は異心がある場合には、反感を起し、激しい政治的な手段で臣下を処置する主君でもある。そして、光尚は臣下の行為や意見に影響され、積極的に行動を取る主君である。

第五節 面目を保とうとする阿部家の遺族

5.1 権兵衛と弟の約束

彌一右衛門は遺言を言い残したあと、一気に子供達の目の前で、切腹したのである。父が切腹した後、その時の子供達の心情はどうであろうか。次の文を見てみる。

彌一右衛門は子供等の前で切腹して、自分で首筋を左から右へ刺し貫いて死んだ。父の心を測り兼ねてゐた五人の子供等は、此時悲しくはあつたが、それと同時にこれまでの不安心の境界を一步離れて、重荷の一つを卸したやうに感じた。(P.331)

このように、彌一右衛門の子供達は父彌一右衛門の切腹したことによって、ほっとしたようである。やはり子供達も父彌一右衛門が生き残されたことを家中のものに嘲笑されていたのを気にしていたのである。要するに、阿部一族の反応により、他人の嘲笑を重視するようになった。子供達の反応については、野村幸一郎は次のように述べている。

父親の切腹を目の前にした時、子供らは悲しみを感じると同時に、不忠義者の子という周囲の蔑視から開放される安堵感を覚えている。ここでは、人間の内面が相矛盾する諸感覚が同居する風景として捉えられている。彌一右衛門の子供達が二重人格者であったわけではない。Aであると同時に非Aであるようなものとして、人間の内面の風景が形象されている¹⁴。

このように、子供達の内心には、矛盾がある風景が見られるのである。彌一右衛門が生き残させたことは子供達に迷惑をかけたので、彌一右衛門が死ぬまで子供達がいつも我慢していたのである。子供達の反応から見れば、父に追腹することをしてもらいたかったのである。一方、彌一右衛門の追腹に従って、阿部家の家督は嫡子権兵衛に継承されることとなった。権兵衛は「島原征伐に立派な働きをして、新知二百石を貰つてゐる」(P.330)で、「父に劣らぬ」(P.330)才能がある武士であることが描

¹⁴野村幸一郎(1998)「森鷗外『阿部一族』の方法」『国語と国文学』第75巻第2号 東京大学国語国文学会編集 至文堂 P.47

かされている。父の遺言を聞いた後、権兵衛は弟達と対話したのである。その対話の内容は次の通りである。

「兄き」と二男彌五兵衛が嫡子に言った。「兄弟喧嘩をするなど、お父っさんは言ひ置いた。それには誰も異存はあるまい。己は島原で持場が悪うて、知行も貰はずにゐるから、これからはおぬしが厄介になるぢやらう。ぢやが何事があつても、おぬしが手に慥かな槍一本はあると云ふものぢや。さう思うてゐてくれい。」

「知れた事ぢや。どうなる事か知れぬが、己が貰ふ知行はおぬしが貰ふも同じぢや。」かう云つた切り権兵衛は腕組をして顔を蹙めた。

「さうぢや。どうなる事か知れぬ。追腹はお許の出た殉死とは違ふなぞと云ふ奴があらうて。」かう云つたのは四男の五太夫である。

(P.331)

以上の文によると、二男彌五兵衛は軍功が立たず、兄権兵衛より劣る武士だから兄に助けてもらいたい請求を申し出、兄権兵衛が弟の請求を聞き入れたのである。それに、五太夫は父が追腹するという行為はお許しの出た殉死と違うのかという疑念を提出したのである。

「それは目に見えてをる。どう云ふ目に逢うても。」かう言ひさして三男市太夫は権兵衛の顔を見た。「どう云ふ目に逢うても、兄弟離れ離れに相手にならずに、固まつて行かうぞ。」

「うん」と権兵衛は云つたが、打ち解けた様子も無い。権兵衛は弟共を心にいたはつてはゐるが、やさしく物を言はれぬ男である。それに何事も一人で考へて、一人でしたがる。相談と云ふものをめつたにしない。それで彌五兵衛も市太夫も念を押したのである。

「兄い様方が揃うてお出なさるから、お父っさんの悪口は、うかと言はれますまい。」これは前髪の七之丞が口から出た。女のやうな聲ではあつたが、それに強い信念が籠つてゐたので、一座のものの胸を、暗黒な前途を照らす光明のやうに照らした。(P.332)

このように、権兵衛は弟達の願いことを聞いた後、阿部家の家督として、兄としての責任から弟の請求を聞き入れ、兄弟は心が一つにまとまったようである。つまり、彌一右衛門の息子たちにとって、父彌一右衛門の切腹という行為が何か予想されない場合があることを心構えをして

おいたのである。しかし、嫡子権兵衛はほかの殉死者の遺族の待遇が違った処分を受けた後、本来の態度も変わったのである。権兵衛の心情描写については、下記の通りである。

嫡子権兵衛は父の跡をその儘継ぐことが出来ずに、彌一右衛門が千五百石の知行は細かに割いて弟達へも配分せられた。一族の知行を合せて見れば、前に變つたことは無いが、本家を繼いだ権兵衛は、小身ものになったのである。権兵衛の肩身の狭くなつたことは言ふまでも無い。弟共も一人一人の知行は殖えながら、これまで千石以上の本家によつて、大木の蔭に立つてゐるやうに思つてゐたのが、今は橡栗の背競になつて、難有いやうで迷惑な思をした。
(PP.332-333)

このように、権兵衛は阿部家の家督として、父の跡をそのまま継承できず、父の知行さえも弟達に分割りされることになった。権兵衛は阿部家の家長になつたが、知行が弟に分割りされたため、身分は予想したものより低かつたのである。権兵衛にとっては、光尚の処分に対して苦く感じながら、不満があるのである。権兵衛はこのような反応があつたのは、自分が阿部家の家督として、父の跡をそのまま継承することが当たり前のこととして期待したことがあつたからである。しかし、現実には、本来の予想が外れ、不公平な待遇にあわせられたのである。

そして、光尚が「下つた扱をしたので、家中のものの阿部家侮蔑の念が公に認められた形になつた」(P.334)ため、さらに阿部家の遺族に致命的な打撃を与えた。そして、不公平な待遇と家中の者の阿部家に対する嘲笑が阿部家としての家督である権兵衛が心中の不満が日々つのらせたのである。ついに忠利の一周忌に、その積もり積もつた怒りを爆発させたのである。

権兵衛は殉死者の遺族1人として、「席順によつて妙解院殿の位牌の前に進んだ時、焼香をして退きしなに、脇差の小柄を抜き取つて髻を押し切つて、位牌の前に供へたこと」(P.334)をしたのである。そして、権兵衛に次のような不満を表明したのである。

貴殿等は某を亂心者のやうに思はれるであらうが、全く左様なわけでは無い。父彌一右衛門は一生瑕瑾の無い御奉公をいたしたればこそ、故殿様のお許を得ずに切腹しても、殉死者の列に加へられ、

遺族たる某さへ他人に先だつて御位牌に御焼香いたすことが出来たのである。併し某は不肖にして父同様の御奉公が成り難いのを、上にも御承知と見えて、知行を割いて弟共に御遣なされた。某は故殿様にも御當主にも亡き父にも一族の者共にも傍輩にも面目が無い。かやうに存じてゐるうち、今日御位牌に御焼香いたす場合になり、咄嗟の間、感慨胸に迫り、いつその事武士を棄てようと決心いたした。お場所柄を顧みざるお咎は甘んじて受ける。亂心などいたさぬと云ふのである。(P.335)

上述した文から分かるように、権兵衛は卑下な態度をとりながら、主君光尚の所為を責めたのである。それに、権兵衛はずっと自らの身分を強調する「にも」(P.335)という言葉遣いを繰り返したことから見れば、一年間心の中に抑えている怒りと恨みが爆発したのである。要するに、光尚の「一段下つた扱う」(P.334)の処分により、「家中のものの阿部家侮蔑の念が公に認められた形になつた。権兵衛兄弟は次第に傍輩に疎んぜられて、怏々として日を送つた」(P.334)という侮辱されたことが権兵衛を刺激し、武士の身分さえも放棄できることを通してこの上ない不満を表明したいのである。権兵衛の行為に対して、秦行正は次のように指摘したのである。

権兵衛が突如として旧主忠利の一週忌法要の席上で自ら鬣を切つて霊前に供えるという乱行に及んだ動機は、光尚にとってはまさに面当て以外の何物でもなかろう。しかし一方権兵衛にとって、この反動的・衝動的な行動は、阿部家の名誉回復の機会を奪った権力者光尚を見切る自恃の念(意地)に根ざしている¹⁵。

引用のように、権兵衛は光尚に対する恨みが行動になり、光尚の前で鬣を切つて霊前に供えたのである。主君に対する面当てであり、権兵衛はこの行動を通して心中の怒りを表明するのである。権兵衛と父彌一右衛門の主君に対する態度が違つても、権兵衛は固執で、自我の世界を中心に生きる男の性格が父彌一右衛門と同じである。

しかし、権兵衛の行動や言動は、主君至上の封建社会において、絶対に許されないことである。特に、先代主君の一周忌で、当代の権力者光

¹⁵秦行正(1999)『阿部一族』論(三)―その悲劇の構造をめぐって(下)』『福岡大学人文論叢』第32巻第1号 福岡大学総合研究所 P.640

尚の目の前ではさらに許されない。「お場所柄を顧みざるお咎は甘んじて受ける」(P.335)と言った権兵衛は、命をかけて主君の権力と戦うというような雰囲気が見られる。このときの権兵衛の身分は家臣ではなく、阿部家の家長として家族の面目を守りたいために、自己の主張をしたのである。そして、阿部家の遺族は、「先代の御位牌に對して不敬な事を敢てした、上を恐れぬ所行として處置せられた」(P.336)と予想したのである。だが、「懇意でない」(P.333)家臣への思いやりを欠く光尚は、「天祐和尚が熊本を立つや否や、光尚はすぐに阿部権兵衛を井手の口に引き出して縛首にさせた」(P.336)のである。予想が外れた阿部家の遺族はこのようなあるまじきな処置を知った後、阿部家の二男彌五兵衛は家族を寄り集め、光尚が権兵衛を縛首したということを評議した。そこで、評議した内容を見てみる。

彌五兵衛以下一同のものは寄り集つて評議した。権兵衛の所行は不埒には違ひ無い。併し亡父彌一右衛門は兎に角殉死者の中に數へられてゐる。その相續人たる権兵衛で見れば、死を賜ふことは是非が無い。武士らしく切腹仰せ付けられれば異存はない。それに何事ぞ、奸盜かなんぞのやうに、白晝に縛首にせられた。此の様子で推すれば、一族のものも安隱には差し置かれまい。縦ひ別に御沙汰が無いにしても、縛首にせられたものゝ一族が、何の面目があつて、傍輩に立ち交つて御奉公をしよう。此上は是非に及ばない。何事があらうとも、兄弟分かれ分かれになるなど、彌一右衛門殿の言ひ置かれたのは此時の事である。一族討手を引き受けて、共に死ぬる外は無いと、一人の異議を稱へるものも無く決した。(PP.336-337)

このように、阿部家の遺族は、権兵衛の所為が臣下として不適切な行為として共感する部分があるが、主君光尚の権兵衛に対する処置は主君のすべき所為ではないことを責めたのである。それに、光尚の激しい処置によって、阿部家の面目もなくなったのである。そのため、全族は主家の討手を引き受けることを決意したのである。それに対して、松代周平は阿部家の悲劇の原因について、次のように指摘した。

主君と家臣の固い絆の上に築かれるべき秩序であるのに、主君が家臣への配慮を欠けばどうなるか。悲劇の原因は一体、どこにあるのか。

第一の悲劇は、まず、藩主細川忠利が何も落度のない阿部弥一右衛門を、ただ好悪の情だけで殉死不許可にしたことから生じた。生き恥を晒す結果になった弥一右衛門は、やがて、自らの名誉を守るため自暴自棄ともいえる切腹を余儀なくされる、続く悲劇の第二幕、嫡子阿部権兵衛の亡君霊前での髻をかき切る行為。これも1人だけ封禄分割を受けた差別が、罪のない武士の面目をつぶす結果を招く¹⁶。

今までの分析によれば、忠利は個人の好悪でなく、彌一右衛門に殉死させない原因は、彌一右衛門が意地で奉公してきた家臣であり、信頼できる家臣であるから、光尚に奉公してもらいたいのである。よって、松代周平の言う彌一右衛門に殉死させない原因に賛成できない。ちなみに、彌一右衛門が追腹するのが、恥を雪ぎ、自己の名誉を守る以外、自分が死ぬことを恐れない武士だと証明したがるのである。それで、松代周平の言う彌一右衛門の行為は自暴自棄ともいえることが賛成できない。最後に阿部一族が立て籠もり、主君に反逆することを決意した原因は、家臣への思いやりを欠く主君の所為によったものである。つまり、主君は権兵衛に公平な扱いをせず、阿部家の面目を失わせることに伴って、主家と阿部家の信頼関係も断絶し、ついに謀反の道へと駆り立てたのである。従って、阿部家の遺族は光尚の所為に影響され、反発する行動をとったのである。

ここまで、阿部家の遺族の臣下像を考察したことを通して、権兵衛は父彌一右衛門の奉公態度と違って、主君の面目を配慮せず、個人の主張を中心にする武士であることが言える。そして、阿部家の遺族が主家に反逆する動機から見れば、彼らは主家に忠誠することより、家族の面目を優先的に考える武士であるといえよう。

¹⁶松代周平（1995）「鷗外『阿部一族』その事実志向の必然性について」『函館国語』第11巻 北海道教育大学函館国語会 P.57

第六節 おわりに

忠利と彌一右衛門における支配関係を考察した結果を通して、忠利は彌一右衛門に殉死許可を与えないのが、彌一右衛門が「萬事に氣が附いて、手ぬかりが無いから、叱らうと云つても叱りやうが無い」(P.327) 家臣であり、「誰でも立派な侍として尊敬はする」(P.328) 武士でもある一方、「意地ばかりで奉公して行く」(P.327) 彌一右衛門が光尚に仕えても、「意地ばかりで奉公して行く」(P.327) という態度が変わるわけがないという理由がある。それに対して、彌一右衛門が忠利の命令に服従し生き残ったのは、忠誠心ではなく、個人の主張である。そして、最後に追腹することを決意したのは、家中に侮辱されたことに堪えられなくなり、「武士としての完璧さ」という心に潜んだ感情から引き起こした結果なのである。

また、主君忠利と臣下彌一右衛門の支配関係という視点から見ると、主君細川忠利と臣下彌一右衛門は、二人の性格や処世態度が違うので、偏執な君臣関係となったのである。彌一右衛門は、主命を優先的に配慮する臣下であり、忠利は先入観があっても、明理的に物事を配慮する主君なので、二人の性格が合わなくても、各々の立場を守り、適切な行動を取るのである。要するに、このような偏執な君臣関係は、個人の考えや態度を守るの上で築いたものである。

さらに、主君としての忠利は彌一右衛門の行為により個人の感情に支配されるという主君像に見られ、彌一右衛門は主命を果たすのが武士としての本分であるという個人の主張で、主君忠利に奉公する臣下像が見られる。また、彌一右衛門は家中のものに対する態度は冷たく、周囲の場面や状況の変化に応じて、適切に扱うことができないという処世態度から見れば、それは彌一右衛門は家中のものが自分に役に立たないものだという彌一右衛門の判断から、高慢な態度を取ったのである。つまり、主君細川忠利と臣下彌一右衛門と共に意地を張っている武士だといえる。忠利と彌一右衛門の支配関係の整理は、図3の通りである。

一方、「阿部一族」の後半部において、主君と臣下の関係における支配関係という視点からみれば、主君光尚と阿部家の遺族の対峙な君臣関係は、互いの未熟な処世態度の上で築いたものである。それは、主君光尚が林外記の献策を使い、阿部家に不平等な対応で処分する。阿部家の遺族は主君光尚の処置に対する不満があり、度々不満を表明した上で、ついに、主家の討手を招き、一族が滅されてしまったのである。つまり、

主人公阿部権兵衛と阿部家の遺族と主君光尚は、武士社会の規則に対する共同な意識を持たず、互いに責め、各々の面目を守るために行動を取る武士像が見られる。光尚と阿部家の遺族の支配関係の整理は、図4の通りである。

二組の君臣関係における武士像をまとめてみれば、封建支配体制における主君の絶対権力支配は、臣下の所為により、主君が心に潜んだ感情が呼び起こされた上で、行動するのである。また、主君が最も重視していた臣下の忠誠心は、阿部一族の表現においては、見られないものである。権兵衛は父彌一右衛門のように自分の気持ちや心情を抑える事がなく、光尚は父忠利のような寛大な器量にも乏しいのである。



図3 「阿部一族」-細川忠利と阿部彌一右衛門

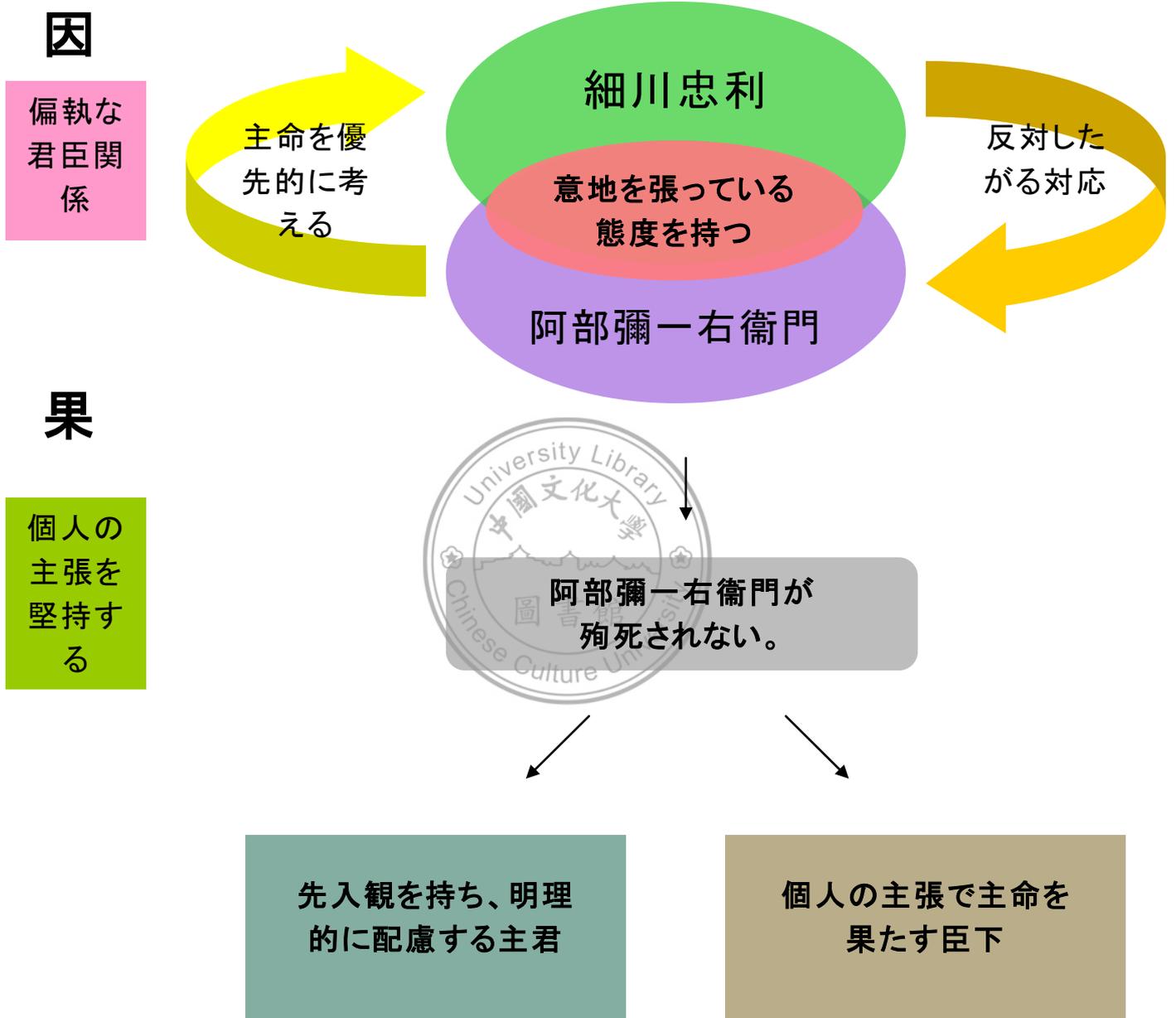


図4 「阿部一族」-細川光尚と阿部家の遺族

